



米山梅吉記念館

館報

春号

2023 Vol.41



紀元 **100** 年

大阪ロータリークラブ

未来へつなぐ  
奉仕と友愛



「大正十年夏の頃より我が實業團英米訪問の企あり。歐州大戰後國際多事の時節眞に有益なる舉とは思へど、今回は余には公私の事情長き旅行に上りがたき理由ありて、其選を免れむと希望したるも、せめては米國のみにてもの勸告に従ひて、遂に伍班に列することとなれり」(米山梅吉著『八十七日』より)大正10年10月、團琢磨を団長とする英米訪問実業団に米山も加わり渡米した。日英実業家同志の意見交換、当時開催された軍縮会議への応援团的役割の意味に加え、米山個人にとっては長男を亡くしたことへの気を紛らわす外遊でもあり、この時の様子を『八十七日』という歌日記にまとめた。

この間米山は、野口英世を訪ねたり、故ルーズベルト大統領の墓参をした。シカゴではロータリー本部を訪れ、事務総長のチェスリー・ペリーから純金製のバッジを贈られた。また、米山がシカゴに到着した11月4日、東京を出る時に見送ってくれた原敬首相が凶弾に倒れたという電報をうけ、「今は不思議なる訣別となれるを感じ」(『八十七日』)と記している。

この訪問団には、井坂孝(第2代第70区ガバナー)、松本健次郎(のちの第70区ガバナー)、そして星野行則も参加していた。星野は、東京ロータリークラブを作るにあたり尽力し大阪に転勤してきた福島喜三次とロータリークラブについて話し合う機会を得て、大阪にもロータリークラブを、という結論で一致した。そして大正11年春、シカゴのロータリー本部を訪問し、チェスリー・ペリーに面会した。懇談の後、ペリーは大阪にロータリーを作ることをすすめ、星野が創立に関する全権を委嘱された。

星野は帰国後、福島とともに大阪ロータリークラブ創立に向けて動き出した。お手本となるクラブは東京ロータリーのみで、メンバーの選考、クラブ定款原案作り、会費等、両氏の努力により、大正11年11月17日25名によって創立総会が開かれた。手探りのスタートではあったが、「会員同志打ち融けあう努力は到底今日の比ではなかった」。(『大阪ロータリークラブ史』より)

# 秋季例祭

## 報告

■ 日時／2022年9月17日(土)午後2時

■ 会場／米山梅吉記念館ホール

開会前墓参

講演

【演題】「日本の異文化交流／鎖国から開国へ」

【講師】松井大英氏

下田了仙寺住職・下田RC



理事長 松村友吉



ご挨拶 第2620地区ガバナー 浅原諒蔵氏



講師 松井大英氏

秋季例祭 講演

## 日本の異文化交流／ 鎖国から開国へ

松井 大英 氏

今日は開国のお話です。日米和親条約は了仙寺を使いました。現在、ペリーの直系の子孫13家族と連絡をとっています。教科書やテレビで見るペリーは、全部うちのお寺で持っています。

鎖国、開くの反対が閉じる、ではなぜ閉国ではなく鎖国なのか。閉じてしまうと出入ができません。鎖国のさは鎖、鎖は多少動けて自由がきき、出入りができた。長崎の出島にオランダ人と中国人が入ることが許され、情報交換ができたのです。

皆さん、知らない土地に行くときは何をしますか。まず地図を調べます。外国人の描いた地図をみると、外国人が日本をどのように見ていたかがわかります。1552年、マルコポーロの時代、ジパングとよばれてヨーロッパから見ると一番東のはじにある日本。1580年に中国と日

本、やっと東アジアがでてきます。さらに1595年オランダ人の画いた地図。400年前、名古屋とかけなかった。オランダは東日本の情報をもっていなかった。1596年、ポルトガルが描いた地図を見ると鎖国が始まる前の段階では、オランダよりポルトガルの方が情報をもっていた。時代が進むごとに南から北へ徐々に正確になっている。外国人は南からやってきた、南からやってくるということで南蛮人と名付けました。



これが幕末のあるときに一気に変わります。元になっている地図が1845年、イギリスの地図です。開国とはこういうことです。ペリー以降、外国情報が爆発的に増えた。今から200年以上前鎖国の時代、これだけの外国情報が手に入るといことです。当時外国人というのは、妖怪おばけと同じ感覚、現実感がない。ペリーがやってきた時、パニックになったのがこの理由です。外国人も日本人と中国人の区別がつかない。日本の侍は腰に刀を差し、面白いのはヨーロッパ人風にかいてある。当時ヨーロッパでは、ヨーロッパ人以外全部野蛮人だと思っていた。ところが日本からは焼き物など輸出されているので、こんなにいいものを作れるなら日本という国は文明国だろう、そこに住んでいる日本人は、おそらくヨーロッパ人並だろうと思った。鎖国時代の日本は文明国、という評価でした。このように鎖国時代は、少ない情報を自分の想像力の中で膨らませていた時代です。黒船は木造船で、隙間があると船が沈んでしまうので、コールタールを塗っていました。当時日本で一番大きいとされていた千石船と比べると、長さが3倍、全体の大きさが19倍。黒船を日本人で最初に見た下田の漁師さんは、ペリーの船を見ていきなり動き出したのでびっくりした。これはもう船の大きさではなく島だ、と。

私のお寺に29のペリーの絵があり、全部違います。外国人だからと怖そうにかいたもの、当時の有名人西郷さんに似せたものなどです。ペリーは髭を生やしていませんが、偉そうに画こうとすると髭を生やすのが一番、と髭を生やしたペリーが非常に多くなります。

この時黒船は、岸ぎりぎりまで入り大砲を岸に向け、上陸時は小船に大砲をのせてバンバン撃ちながらきます。音だけですが、こっちはこれだけもっているぞと見せるためです。約5000人のお侍が取り囲んでいます。当時日本人は体が小さくアメリカ人になめられるので、体の大きな人が60~80人集められ、ペリーの前で相撲をとらせたり、重い荷物を運ばせたりしました。

ペリーはたくさんお土産をもってきました。その一つが、4分の1の模型の蒸気機関車で、実際にレールを敷いて走っている。日本人はこの時初めて蒸気機関車を見て、約40年後には国産機関車を作っています。日本人の技術研修能力が凄まじかった。その理由は、識字率。特に子どもの読み書きができる割合が多かった。当時世界一といわれたイギリスの子供の4倍あったそうです。

だから少し知識を加えればすぐに追いつける。当時、寺子屋や藩校など塾や学校が、確認できるだけで2万あったそうです。国力をあげるには教育をつけること、それを歴史の中で最初に示したのが日本です。

交渉の細かいことは、江戸からも近く静かな下田港で決めました。上陸の場所は了仙寺の参道からまっすぐな所で、正面に本堂。この中で細かいことを決めている。最初の為替レートや、遊歩権が外国人に初めて日本で認められた町が下田です。下田を開国の町というのは、ペリーが来たからでも黒船が来たからでもなく、日本で最初に外国人に開放された町だからです。アメリカ人が日本人の写真を撮る様子、あわせが逆、死に装束です。写真を撮られると2、3分以内に死ぬと思い、皆写真だけは嫌がったといいます。当時、下田の街中で色々なカルチャーショックがあった。「さんちょう」と聞こえた。「サンキュー」です。「はうまっちどる」ものを買うのはわかる。「はまちどり」が「これいくら」となる。外国人風になまり英会話が必要になる。日本で初めて英会話が必要になった町です。

実は日本は、交渉に準備万端整えていました。現場の責任者林大学頭は、約250年間の日本の外交歴史をまとめた外交のスペシャリストで、長崎と江戸から財務と外交のトップ2人を呼び話を始めた。その記録が『ペリー提督日本遠征記』。日本側の記録は『墨夷応接録』。これは、アメリカ側よりはるかに正確なものです。二度の交渉で、林はペリーの言葉尻を片っ端からとらえて追い込んでいき、日米和親条約は下田で完結します。





1926年 全日本RC第1回懇親会

# 大阪ロータリークラブの 1922-2022 100年



1928年 新年家族会 大阪ホテル

## 草創期の大阪ロータリークラブ

大阪ロータリークラブ(以下RC)は、星野行則氏がロータリー本部から直々にその全権を委嘱され、福島喜三次氏と共に1922年11月17日に創立した、本部直轄クラブです。創立メンバー25名には、初代会長の星野氏、幹事の福島氏の他、村田省蔵氏、平生鈞三郎氏、片岡安氏、伊藤忠兵衛氏、小林一三氏など、大阪を代表する各界の第一人者が名を連ね、奉仕友愛と「快活和楽」をクラブ方針とし、会員間の親睦を第一に独自のクラブ運営をめざしました。

草創期には、例会前の歌唱や出席率コンテストなど、日本ロータリーの原型となる試みが次々と例会を賑わし、お互いをニックネームで呼び合おうとしたこともあり、このニックネーム授与は会員入会の定例行事となり、新旧会員の距離を一気に縮めたようです。

昭和初期にはロータリー講座や少年キャンプなど、

現在にも通じる奉仕活動も始められました。なお、社会奉仕資金の捻出方法として考案されたニコニコ箱が、大阪RCの例会に登場したのは1936年7月でした。

こういった大阪RC独自のクラブ運営は「楽しいロータリー」として知れ渡り、その後に全国各地で生まれるクラブの標準モデルとなったのです。

## RI離脱と大阪金曜会の雌伏9年

1930年代に入ると、アメリカとの関係は悪化の一途を辿り、大阪RCは苦渋の決断を迫られました。1940年8月に大阪RCは国際ロータリー(以下RI)からの離脱を決議し、解散。11月に新団体として大阪金曜会を設立しました。そして、日米間の戦争が現実のものとなり、日本は敗戦国となったのです。

金曜会は、戦中戦後を通じて1回も休まずに例会を続けています。例会会場のホテルがGHQに接収されても、何とか大丸百貨店の1室を借りて例会を続けました。もちろん食事の提供などできませんので、腰弁当での例会です。しかし、規則に関してはかなり寛容になっており、ロータリー体制を取り戻すためには、新たな資格審査による会員の整理が必要でした。

そして、1949年3月にRIが日本ロータリーの復帰を認めると、大阪金曜会は役割を終えたのです。ロータリーを名乗れぬ中でもロータリーの伝統を守り、一回も休まずに例会を続けてきたことは驚異としか思えません。

## 再建後の大阪ロータリークラブ

1949年4月1日、68名のチャーターメンバーで新生大阪RCは創立されました。RI離脱後に入会した会員が多く、クラブ再建は「ロータリーとは」から始めなければなりません。しかし、その後、68名であった会員数は、1952年には125名に倍増し、1970年に300名を数えると、世界でも有数の大クラブへと成長したのです。

この拡大期のクライマックスは、1970年に大阪で開催された大阪万国博覧会でした。この国際的大イベントで、大阪RCはロータリー例会を毎日開く計画を立て、その事業を主導したのです。この事業は歴史的な大

成功となり、日本ロータリー及び大阪RCは、国際社会において大きな存在感を示すことができました。

その後の25年間(1995年頃迄)は、大阪RCは概ね300名を越す会員数を維持し、ロータリーの発展に貢献してきました。しかし、ロータリーが変転期を迎えた1990年代後半からは、会員数も減少傾向になり、奉仕活動も個人やクラブでの活動から、地区或いはRI主導でのプロジェクトに移り変わりました。そういった時代の変化に際しても、大阪RCはロータリーの原理原則を守り、楽しいロータリーを実践することを伝統とし、継承してきたのです。



1960年 日立造船工場見学のAFS学生



1970年 万国博覧会平和のバラ園



式典歓迎の挨拶 上山直英会長

# 大阪ロータリークラブ 創立100周年記念行事

大阪RC幹事 西尾公志

大阪ロータリークラブ(以下RC)は、2022年11月18日(金)、クラブ創立100周年を記念し、リーガロイヤルホテル大阪において記念式典及び祝賀会を開催しました。ジェニファー・ジョーンズRI会長、イアン・ライズブリーRI財団管理委員長を始め、国内外から歴代RI会長・理事ご経験者も多数ご出席くださり、姉妹クラブのソウル・メルボルンRC、2660地区ガバナー、地区役員、パストガバナーほか地区内各クラブ会長、そして東京・京都RCと

神戸RCを筆頭に当クラブがスポンサーをさせていただいた39子クラブの、会長・幹事の皆様にもご出席いただきました。さらに、90周年事業「宮古・大阪みおつくし奨学金制度」にご尽力いただいた岩手県・宮古東RC会員と元奨学生併せて21名が、岩手、宮城、東京、広島各地から駆けつけてくださいました。これらご来賓203名に当クラブ会員・家族を加え、計475名の皆様とお祝いできたことに感謝したいと思います。



式典RJジョーンズ会長挨拶

## 記念式典・祝賀会

11月18日(金)16時、大阪RC友好委員会、100周年実行委員会の委員が受付、会場案内など、総力を挙げてお客様をお迎えし、ホワイエでは100年の歩みをたどるパネル展示、呈茶席などでご歓談いただきました。「ロイヤルホール」での記念式典では、大阪RCグリークラブによる「R・O・T・A・R・Y」の後、今回100周年記念として制作いたしました「大阪RC100年メモリアル映像」をご覧いただきました。続いて、上山直英大阪RC会長による歓迎の言葉と100周年記念事業の発表、ジョーンズRI会長からご祝意と「IMAGINE」の共有を、宮里唯子2660地区ガバナーからもご祝意と地区内クラブのロールモデルとしての期待を頂きました。

続く記念コンサートの後、会場を「光琳の間」に移して、祝言の能舞「翁」で祝賀会が開会。嘉納治郎右衛門直前幹事の口上により、総勢21名の来賓の方々による「鏡開き」、吉川秀隆直前ガバナー(大阪RC)によるご来賓、参加各クラブ紹介と乾杯で祝宴の口火を切り、工夫を凝らした「長寿食」メニューの紹介、鳥井信吾直前会長からの記念品紹介、宮古・大阪みおつくし奨学金委員会・黒田章裕委員長から90周年記念の継続事業の10年間の報告と元奨学生紹介がなされ、舞台上で元奨学生から一言ずつメッセージを頂きました。

最後に、立野純三パストガバナー(大阪RC)の謝辞のあと、「手に手つないで」のピアノ演奏の中、21時過ぎ散会しました。

## 百周年事業について

大阪RCは、百周年を記念して3つの事業を予定しております。

一つ目は、「宮古・大阪みおつくし奨学金」の事業を引き継ぐ形で、新生・大阪公立大学の学生を対象に「みおつくし奨学金」制度を開始します。

二つ目は、2022年2月に開館した「大阪中之島美術館」において実施される、子供たちに対する、ワークショップ・プログラムを支援いたします。

三つ目として、社会に対するアクセスがうまくいかず、取り残されている子どもたちを支援するための事業、これらの活動には、RACやIACにも参加してもらって進めるつもりです。

私たちは、百周年の事業として、RCの創設にかかわった人たちの「生き方、考え方」を手本として、若者たちに「人生の選択肢」をできるだけ多く示すことができる活動をしたいと考えております。

百年は一つの通過点にすぎません。大阪RCが引き続き、社会に貢献できる活動を続けてゆくために、改めて、皆様方からのご支援をお願いいたします。

# 米山梅吉



# 法要例会

横浜鶴見北RC 堀野弘樹

横浜鶴見北ロータリークラブでは令和4年10月24日曜日、米山家のお墓がある曹洞宗大本山總持寺にて米山梅吉法要例会を開催いたしました。公益財団法人ロータリー米山記念奨学会理事 吉田隆男PDG並びに直前理事 大野清一PDG、第2590地区米山記念奨学委員会 齊藤正彦委員長、地区内ロータリアン、第2590地区米山学友会 王鑫会長を始め、多くの学友、奨学生にご参加いただきました。また、公益財団法人米山梅吉記念館より市川真理学芸員にもおいただきました。

この法要例会は、以前親クラブの横浜東RCと兄弟クラブ横浜鶴見西RC、そして当クラブの3クラブが合同で開催をしたことがあったそうですが、当クラブ石渡会長が今年度の公約に掲げ、米山梅吉翁のお墓のある地域のクラブとして、ぜひ法要例会を実施したいとの思いで、会員である曹洞宗照光山常倫寺上原住職に協力を仰ぎこの例会を実施いたしました。

まず、千畳敷の内中外陣の広さを有する大本山總持寺太祖堂にて副監院様を導師とし、脇集20名で読経をしていただきました。法要の後、精進料理をいただき、例会を開催いたしました。当日の卓話では齊藤米山記念奨学委員長より「米山梅吉翁の生涯」のタイトルで梅吉翁の年譜を講義していただきました。毎年、米山月間では梅吉翁にちなんだ歴史等の卓話は多いですが、齊藤委員長は独自で研究をしていますので、今までに一度も聞いたことのないエピソードや研究を通しての私見です、と断りを置き、年譜を追いながら、当時



梅吉翁が何を考え目指していたのかということに、思いをはせながら聞くことができた月間ならではの貴重な卓話をいただきました。

例会が滞りなく終了した後は、いよいよ梅吉翁の墓参へと参りました。お墓は總持寺内の墓地の中では鶴見一帯を見渡せる小高いところで水屋のそばにあります。このお墓はご子息をなくされた際に建立したもので長泉のお墓より梅吉翁のご遺骨が分骨されているとのことです。梅吉翁のゆかりのある地元ロータリークラブとして、現在墓参の際には米山奨学生や学友たちと共に草刈りなど手入れを行っています。当日は当クラブには2名の僧侶が在籍しておるので、墓前でも読経し手を合わせました。

法要、卓話、墓参と梅吉翁を偲びながら、晴天に恵まれロータリアンとして奉仕の精神を再確認した充実の良い1日を過ごすことができました。



# 俳人 巖谷小波



大分県玖珠町立  
久留島武彦記念館

館長 金 成妍



米山梅吉が白人会に入会した大正五年の小波（47歳）

「頭を雲の上に出し 四方の山を見下ろして〜♪」で始まる「ふじの山」という唱歌をご存知でしょうか。その歌を作詞したのが巖谷小波（以下小波と表記）です。地方に伝わる民話を採集して、日本で初めて個人による児童文学シリーズ『日本昔噺』を刊行したのも、小波です。その第一巻のお話が「桃太郎」でした。流れて来た桃を「大そう大きな桃」と表現したり、最後を「めでたしめでたし」で締めたりと、読者が子どもであることを意識して話に引き込む仕掛けを大胆に加えています。「童話」という用語すら定着していなかった時代に、小波は「お伽噺」として児童文学を日本に広めたのです。小波の作品は大人気を博し、芥川龍之介も小さい頃、小波の『日本昔噺』を愛読したといひます。



日本で初めて子ども達にお話を語り聞かせる口演童話を試みたのも、日本で初めて専門俳優が子ども達に演じる児童演劇の脚本を書いたのも、朝鮮の昔話を日本で初めて紹介したのも、日本の児童文学者として初めて朝鮮を訪れて口演童話をしたのも小波でした。当時の新聞記事を調べますと、「日本お伽界の泰斗として三歳の童子も尚よく其名を知れる巖谷小波先生」（『京城日報』大正十二年五月三十一日）と紹介されています。このように、小波は日本近代児童文学史を拓いた児童文学者ですが、ジャーナリストであり、編集者

であり、そして、高名な俳人でもありました。本稿を通しては、俳人としての小波について簡単に紹介させていただきます。

小波は明治三年六月六日、東京府麴町平河町（現・千代田区）で生まれました。水口藩の藩医だった父の巖谷一六（本名・修）は、日下部鳴鶴、中林梧竹と並ぶ「明治の三筆」と称された名高い書家でした。小波は幼年期、祖母から狂言や伝奇物語を語り聞かされながら育ちました。また碁石の並べ方や和歌、俳句の作り方を教わり、歌舞伎や能のような芸術文化に親しむ環境で成長しました。神楽を見ることも好きで、八歳の時に「十五日 今か今かと まつりかな」と詠んでいます。医師になるべくドイツ語と漢文を学ばされましたが、十歳の時、ドイツ留学中の兄から届いた美しいドイツのお伽噺集に夢中になり、文学への志向を強めます。一七歳から「漣山人」の雅号で作品を発表、文学結社の硯友社に入って尾崎紅葉、石橋思案、川上眉山と交流を深めました。明治二三年には尾崎紅葉と俳句結社の紫吟社を結成します。日本児童文学の嚆矢とされる「こがね丸」を発表して一躍有名になった後、京都日出新聞の主筆に迎えられて京都へ向かいます。その頃小波は、市川團十郎も入会を断られた、今でいう会員制の料亭・紅葉館の女中、須磨と親しくなりましたが、京都にいる間、博文館の大橋新太郎に横取りされるということがありました。須磨の心変わりに親友の尾崎紅葉が憤慨し、紅葉館の酒席で須磨を激しく詰問、廊下に連れ出して足蹴にしました。それがモチーフになって誕生したのが、あの有名な尾崎紅葉の『金色夜叉』の熱海の場面なのです。

京都滞在中、小波は二階の部屋に尾崎紅葉が書いてくれた「唯想楼」という横額をかけ、朝晩東山を眺めながら句を詠み、京都での生活を楽しみました。給料の半分を古俳書購入にあてるほど、俳句の研究にも励みました。第三高等中学校に入学して京都へ来た高濱虚子と河東碧梧桐が小波宅を訪ね、俳句関連古書を借りたり、句会を催したりします。年が明けると、小波は瞳々会という俳句会を立ち上げ、清々亭での俳句会を主として京都の文学者との親睦をはかりました。二年間の京都生活を終え東京に帰り、翌年には角田竹冷を中心に秋声会という俳句会を結成します。そしてその年に号を「漣」から「小波」に改めました。



明治二九年には久留島武彦の提案で小波を中心に木曜会と名付けた文学研究会を毎週木曜日に開きました。回を重ねるごとに俳句の会としての性格が濃くなった木曜会には、永井荷風、押川春浪、蒲原有明、羅蘇山人、太田南岳、弟の巖谷春生、冬生も会員に加わり、小波が他界するまで続きました。木曜会が結成された明治二九年一月から、小波は秋声会の俳誌『秋の声』に毎号、俳句や俳文を寄稿し、翌年『秋の声』が廃刊すると『太陽』に寄稿をつなぎました。その一方、博文館から発刊された『俳諧論集』の編集者となって明治三二年に『俳諧文庫』第十三編と第十五編を、翌年に『俳諧文庫』第十九編を出版しました。

明治三三年九月から二年間は、ドイツのベルリン大学付属東洋語学校講師として招かれて渡欧。駐独日本大使館の書記官・水野幸吉が小波のベルリン赴任を機に、明治三四年、白人会というベルリン在住日本人俳句同好会を立ち上げました。伯林の「伯」を二分して作られた名前の白人会には、ベルリン在住の公使館員や留学生及び駐在員の中から同好者が集まり、月一回から二回、各自の宿を俳席と定め、小波が宗匠をつとめました。水野幸吉の他、盧百寿、芳賀矢一、美濃部達吉、加藤正治、海軍士官の窪田重式など、各方面の人が集まりました。ベルリンから帰国した後は、白人会の中心が東京に移され、ベルリンの会員の他、フランスのパリで組織された巴会の会員も加わり、白人

会は百人を超え、この会も小波が他界するまで続きました。尾崎紅葉、有島武郎、有島生馬、入沢達吉、中島久万吉、勝田主計のような文学者に、外交官、法官、研究者、画家、技術者、軍人、医師など、この会にも様々な分野の錚々たる面々が寄り集まりました。米山梅吉も大正五年十一月から白人会に入会し、小波から付けられた「尋九」という俳号で活動しました。小波はこのような俳諧園遊会の活動を、「楽俳主義の妙味」といって楽しみました。

大正二年には武田鶯塘主幹で創刊された俳句雑誌『南柯』の顧問になって毎号俳句や随筆を寄稿。同年、『俳諧注釈集』（博文館）上巻を佐々醒雪とともに編集し、『俳諧叢書』（博文館）全六巻の中、第一編を担当しました。『名家俳句集』（大正二・一二）にも携わり、その他にも『僕の旅』（東京堂、大正四）、『俳通俳句便覧』（博文館、大正五）、『山から海・俳味紀行』（博文館、大正十）、『俳文学大系』（全十二巻、大鳳閣、昭和四）、『俳句表現辞典』（立命館出版部、昭和六）、『句集 さいら波』（千里閣、昭和七）などの俳句関連著書を多く残しました。このような地歩は、余技の道楽の次元を遥かに超えた、俳句に対する深い愛情と責任を感じさせる俳人としての面貌を見せてくれます。小波は自ら開拓したお伽噺の世界を俳画の世界に融合させ「お伽俳画」という独創的な世界も創り上げています。文字数の都合上本稿では割愛しますが、ご興味のお持ちの方は『巖谷小波おとぎの世界』（求龍堂）をお読みください。

三三〇余名の代表的な近代文学者を、作家、詩人、俳人、歌人に分けて、その作家たちの筆跡を収録した『文士の筆跡』（二玄社、昭和四三）には、小波が「俳人」として分類されています。このような分類は、小波没後、日本の現代社会が小波をどのように記憶しているのか、その認識を反映しているものと思われます。現在、北海道から沖縄まで、日本列島の全域にわたって、把握されただけで四十三基の小波の句碑が残っています。これらの句碑を通して、小波が大衆にこよなく愛された俳人であったことを確認することができます。



何の苦も夏の汐路や島三里  
(静岡県熱海市・熱海サンビーチ)



加藤正治（犀水）  
明治34年

# 白人会に連なる人びと

～信州が生んだ俳人 加藤犀水について～

長野県生坂村  
教育委員会社会教育主事

幅 国洋



## 加藤正治（俳号・犀水）の人と生涯

拙稿は「白人会」の同人として米山梅吉とも交流のあった加藤正治（俳号犀水）について、白人会、巖谷小波との関りを中心に紹介するものである。

加藤（旧姓平林）正治は1871（明治4）年、長野県東筑摩郡生坂村の旧家、平林家（通称「一星」家）に生まれ育った。生坂村は松本盆地の北端に位置し、山間を縫って数十キロにわたって続く犀川渓谷の入り口である（犀川は長野盆地で千曲川と合流し新潟県との県境から信濃川と呼ばれる）。狭隘な河岸段丘の上に広がるわずかな農地は、水の便に恵まれない畑作地帯の僻村であるが、江戸時代初期に長崎から葉タバコの種が持ち込まれて村内での栽培が広まり、重要な換金作物としてやがて松本盆地の村々へも普及し、上州を経て江戸まで販路が拡大し、「生坂蓆」のブランドで高値で販売された。平林家は、生坂蓆の生産から集荷、出荷までをおこなう在郷商人、在方荷主として財力を築き、名主として村政の中心をになった。（正治や、やはり俳人として有名な従兄弟の平林鳳二が暮らした平林家旧宅は、タバコ生産農家の建築の特徴を残し、「一星亭」と呼ばれ国の登録有形文化財に指定されている。）

タバコによって得られた富と江戸、名古屋との往来によって、地域には豊かな文化的風土が根付いていった。特に俳句は手軽な庶民の娯楽として浸透し、村内には多くの句額や句碑が残されている。後に犀水や鳳二らの俳句の宗匠を生んだ背景にはこうした風土があったと言える。

正治は県立松本中学（現松本深志高校）、第一高等中学（後に第一高等学校）を経て帝国大学法科大

学（後に東京帝国大学法科大学）に進学し法学研究の道に入った。将来を嘱望され、大学を卒業した1897年、恩師の薦めで日本郵船の副社長であった加藤正義の長女すみと結婚、加藤の養子となる。

1899年、文部省留学生として渡欧した正治は、ハイデルベルク大学、ベルリン大学、キール大学などドイツの諸大学や、パリ大学に学んだほか、休暇を利用して英国や北欧を精力的に旅行し、途上、パリ博覧会やイギリス国王の戴冠式などの歴史的出来事を見分している。（ベルリンには1900年9月から01年3月、01年9月から02年4月の2回在住）

研究の対象は、法学者加藤正治の代名詞ともなる破産法を筆頭に、商法・民法・民事訴訟法など私法全般にわたる。また、義父の郵船経営にかかわりの深い海洋法にも関心が深く、万国海法会議（02年9月）には日本政府委員として出席している。20世紀初頭のこの時期、「税権の完全回復」を実現する前提として、国内法の整備は喫緊の課題であり正治の法学研究の目的と意義もまたそこにあった。欧州留学から1903年に帰国したのちは、東京帝国大学教授として1931年の退官まで破産法・民訴法・商法・海法などを担当している。定年退官後は中央大学に招かれ、1949年には新設の職である初代総長に就任し高等教育の発展に尽力した。この間、1947（昭和22）年には枢密顧問官に任ぜられ、最後の枢密顧問官として日本国憲法の審理に尽くしたが、1952（昭和27）年、心臓麻痺のため81歳の生涯を閉じた。誠実に、真摯に学問研究に励む彼の姿は、その句「歩々ゆるく遅きは克たむ富士詣で」に重なるものがある。

## 俳句との出会い～犀水と白人会～

犀水の俳号が、生坂村の生家(一星亭)の下を流れる犀川に因んでいることは言うまでもない。生坂村の「加藤正治博士 頌徳館」には、正治の関係資料や遺品などが数多く展示されているが、その中で「拙作集」と題された全22冊の手書きの句帳が目を惹く。留学から帰国した1903年4月から始まるこの句帳には、亡くなる前日まで、50年間にわたる2万2千句余が記されている。習作の中から良いものだけを転記したものと思われる。加藤正泰編『わさび田の唄』(昭和63年・私家版、正泰氏は正治の四男)は「拙作集」から300句を選んだものであるが、その解説で正泰氏は、犀水の作句数は4万近いと推定され、「大学教授とか研究者という仕事をもっていなければ、あるいは俳人犀水宗匠の方に進んでいたのかもしれない。」と述べている。



句帳「拙作集」  
左は22巻の最終頁

犀水が俳句に惹かれたのは、一高以来の親友である美濃部達吉(俳号古泉)の影響とされるが、決定的な出会いはドイツ留学中のベルリンでの巖谷小波との出会い、そして白人会への入会であった。犀水は水野醉香(本名幸吉、駐独公使館員)によって1900年暮れに小波に紹介されたという。翌01年1月に白人会が発足するが、犀水が4月にキール大学に転学したため白人会への本格的な参加はベルリンに戻る同年9月以降となったようだ。犀水は小波について、実家の平林家にあてて次のように書き送っている。

「…当地には過般も申上げそうろう通り、巖谷小波山人という発句の宗匠これありそうろうゆえ、学問の余暇、一ヶ月に一度くらい発句の運座の催し会これあり申しそうろう。小生などは全く無器用なれども勧められて時々出席いたしおり申しそうろう。一ヶ月一度位ゆえに異国にて無聊を慰むるには至極よろしく…」

《「頌徳館」展示資料 平林行雄宛書簡 明治35年1月29日付・筆者書き下し》

留学中の3年余に90通もの絵葉書を生坂の実家に送った筆まめな犀水だが、1902(明治35)年2月の絵葉書では、日本から送られた信州名物の氷蕎麦(寒晒ソバのことか)を友人たちと堪能し、各々が俳句を詠んだと、小波の「蕎麦切や郷を談ずる冬一夜」を紹介している。一つ年上の小波との俳句を通じた交友は、遠く離れたドイツで郷愁を募らせる犀水にとってかけがえのないものとなったことであろう。

1902年11月に小波が帰国し白人会は東京に移ったが、翌年4月には犀水も帰国して句帳「拙作集」をつけ始め白人会の活動にも積極的に参加した。犀水が本格的に俳句の道を歩み始めた時期である。白人会については、巖谷小波の没(1933年)後一周年を記念した『伯林集・白人集』(1934年・白人会発行、国立国会図書館「デジタル化資料送信サービス」で閲覧可能)に詳しい。この書によれば、1901年1月から最後となる1933年6月までの32年間、330回あまりの句会(投稿による句会も含む)が開かれているが、犀水はそのうち266回に出席し精勤している。犀水はこの書の発行人であり、「はしがき」において白人会創立の経緯を詳述している。また星野麦人「東京に白人会」(同書所収)は、犀水について、創立以来の古参の同人で白人会の「斡旋の勞」をとる人物と紹介している。口絵の記念写真(10・20・25周年記念の3枚)には、遠慮するように必ず集合写真の左端に位置する犀水の姿が見え、いかにも幹事役に徹し白人会の維持、運営に尽力したようすがうかがえる。

犀水は東京での活動にとどまらず、故郷の生坂に足しげく帰省し、近在の村々をまわっては同好の士と「犀水会」と名付けた句会を開き俳句の普及に努めた。1927年4月20日、従兄弟の平林鳳二(俳人・書画鑑定家として高名で当時は大阪に在住)の代表作「あの山が高いか雲雀高かろか」の句碑が建立されることになり、それを記念して生坂村で大句会が開催され、数百名の聴衆、1万余の俳句の応募があったという。巖谷小波を始め二十数名の宗匠が招かれて大成功をおさめたが、その裏で犀水が奔走し仲介の勞をとったことは言うまでもない(平林鳳二『雲雀桜』昭和2年、私家版より)。故郷(生坂)を想う犀水の心情はその句「吾里や飾り兜を姿にて」によく示されている。



明治35年  
2月ベルリンより

1917(大正6)年、信州の教員、青年団の自主的な学術セミナーである信濃通俗大学(大町市、通称「木崎夏期大学」)が設立されると、犀水は理事に選ばれ資金面も含めて運営に力を尽くしている。法学者としての大成に甘んずることなく、東京に在ってなお、故郷の教育・文化の振興に尽くしたその功績は大変大きい。

※加藤正治については『マンガふるさとの偉人加藤正治物語』(2022年3月生坂村教育委員会・生坂村ホームページ [www.village.ikusaka.nagano.jp](http://www.village.ikusaka.nagano.jp)のパナーから閲覧可能)参照

### 【付記:米山尋九、角田竹冷と白人会について】

『米山梅吉記念館報』(Vol.14:2009年秋号)所収の井口賢明「米山梅吉と俳句」は、米山梅吉を白人会に結び付けた人物として角田竹冷を詳しく紹介している。すでに俳句の宗匠として高名であった竹冷が、故郷の後輩である梅吉(俳号・尋九)に白人会を紹介したのであろうと推察される。竹冷は1919年に亡くなるまでの17年間、170回の句会のうち89回に出席する精勤ぶりであり、白人会の中心メンバーの一人として会を支えた。

米山尋九は1916年11月に初めて参加し、1928(昭和3)年まで白人会に参加したことが確認される。130回余りの句会に29回の参加であるから精勤とは言い難いが、米山の子息の逝去(1921年)、義父の逝去(1922年)に際して白人会は追悼の句を出席者に求めており、白人会同人にとって尋九が大変親しまれた人柄であったことが想像される。竹冷、尋九と白人会・犀水とのかかわりについては、さらなる研究が待たれる。

## お知らせ

# 米山梅吉記念館 春季例祭

[日時]2023年4月22日(土) 14時  
講演 14時30分～  
[場所]米山梅吉記念館ホール

### 講演

演題 「孫文と梅屋庄吉の友情から学ぶ、  
時を繋ぐ交流の在り方」

講師 小坂 文乃氏  
(東京 RC)  
日比谷松本楼  
代表取締役社長



### アトラクション

■ マリンバ演奏  
柴山 拓也・由美氏

### 懇親会

ロビーにて講師、演奏者を囲んでの懇親会。  
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分  
東名沼津ICより15分

[開館時間]午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日 ●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報 Vol.41 春号

■発行日/令和5年3月20日 ■発行者/公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 松村 友吉

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1

TEL(055)986-2946 FAX(055)989-5101 E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp

米山梅吉記念館  
公式ホームページ  
<https://yoneyama-umekichi.jp>

